Spring Up
『すべての人が過ごしやすい
トイレプロジェクト』
2024年度報告書

2024年8月発行

発行元
Spring Up（岩下知歩・及川奈桜・小室芽衣・谷本成星）
埼玉大学ダイバーシティー推進センター（担当：菅野摂子）

目次

声明を出す経緯 **1**
本プロジェクトについて **1**
プロジェクト開始までの経緯 1
本プロジェクトの目標・目的 2
プロジェクト開始から2024年3月までのあゆみ 2
ダイバーシティ推進センターの協力を得るまで 3
「生理用品の設置に関するアンケート」の概要、結果 4
無料生理用品設置の詳細 5
「すべての人が」過ごしやすいトイレプロジェクトの思い **6**
設計段階からすべての人に 6
男性トイレへの設置が意味すること 6
存在を保証する 7
生理のタブーを覆す 8
利用実態 **9**
最後に **10**
参考・引用文献・資料 **10**

声明を出す経緯

私たちSprign Upは活動の一つとして「すべての人が過ごしやすいトイレプロジェクト」を行ってきました。プロジェクトの主な目標は、生理用品の無料設置と男性個室トイレへのサニタリーボックスの設置です。このプロジェクトの目標は部分的に達成され、オンライン記事やいくつかの新聞社に取り上げていただけるほどの成果をあげ、記事に対するSNS上の反応も大きなものでした。しかし、その多くは疑問・批判の声であり、中には中傷や著しい誤読もありました。私たちは、多くの方にこのプロジェクトを知っていただけたことは嬉しい反面、記事では伝えきれない部分もあることに悩みました。

そのため、このプロジェクトに疑問・批判を投げかけてくださった方や、詳細を知りたい方、なにより、このプロジェクトの利用者である埼玉大学生や関係者の方が疑問に感じた際に、設置者の意図・経緯を知ることができるものを作りたいと思い、この報告文を出すことにしました。できるかぎり詳細にこのプロジェクトの経緯・成果・思いを記述するためには多くの文字数とページ数が必要でした。

この活動が生理用品の「設置だけ」で終わらないために、少しでも私たちなりにできることがあればと思います。

本プロジェクトについて

プロジェクト開始までの経緯

「すべての人が過ごしやすいトイレプロジェクト」は、2022年6月、「生理用品がトイレにあったらいいのにな」という、あるメンバーの声から始まりました。最初は、「手ぶらでトイレに行けたら快適だろうな」など、個人的な利益の話からスタートしました。しかし、メンバー内で議論していく中で、「生理用品は生活必需品なのだから、トイレットペーパーと同じようにトイレに常備されるべきじゃない？」「生理用品を持ち歩くようにしているけど、忘れてしまうこともある。トイレに生理用品があれば、そういう時にも助かるよね。」「授業がもうすぐ始まるのに、生理用品を持ち合わせていなかったとき、本当に困った。」などの意見や経験談から、生理用品無料設置の必要性がメンバーの中でさらに強くなりました。それと同時に、「生理＝恥ずかしいものというような感覚を持ちがちだよね。」「生理がある人はたくさんいるのに、生理に関する悩みとか、生理の話は個人的なことだと捉えられがち。」など、生理のタブーを問題視する意見も上がりました。さらに、「生理がある人が必ず女性トイレを利用するとは限らないよね。車いすユーザーはみんなのトイレを使うだろうし、トランスジェンダー男性[1]で生理があるけど男性トイレを利用している人もいるかも。」「埼玉大学の男性個室トイレにはサニタリーボックスが設置されていないから、サニタリーボックスの設置も必要じゃない？」「生理が無くても尿漏れパッドなどを利用している人がいるから、サニタリーボックスは設置するべき。」などの意見も挙がり、みんなのトイレ[2]と、男性トイレへの生理用品の設置、男性個室トイレへのサニタリーボックスの設置も必要であるという考えに至りました。

本プロジェクトの目標・目的

以上のような議論を経て、私たちは以下の目標・目的を設定しました。

---

[1] トランスジェンダーは、出生時に割り当てられた性別と、自身の認識している性別が一致していない人をさします。具体的には、トランスジェンダー男性（以下、トランス男性）とは、出生時に割り当てられた性別が女性で、自身の認識している性が男性の人のことをさします。

[2] みんなのトイレとは、2017年に埼玉大学生の有志が集まり、「学内のトイレを利用するすべての人が性も障がいも問わず使いたい時に自由に利用できるトイレ環境づくり」を目標に、埼玉大学内の多目的トイレに「みんなのトイレマーク」をつけたことに由来している。

目標１　すべてのトイレに生理用品を無料で設置
　目的１　生理による辛くて面倒な思いを楽にし、予測できない生理で困る人を減らす。
　目的２　生理のタブーを覆す
　　・「生理=恥ずかしいもの」という意識を自覚してもらえるようにする。
　　・生理がある人もない人も、生理は一人だけで抱える問題ではないということを認識してもらえるようにする。

目標２　男性個室トイレにサニタリーボックスを設置
　目的１　生理があっても見えない存在にされてきた男性がいる現状を認識してもらえるようにする
　目的２　サニタリーボックスを見つけて、これまで考えてこなかった様々な人が抱える状況を想像するようになる男性を増やす

プロジェクト開始から2024年3月までのあゆみ

年度	月	内容
2022	6	プロジェクト内容、目標、目的を決定し、プロジェクトを始動する。プロジェクトの第一歩として、埼大関係者を対象としたアンケートの作成を開始する。
	11	アンケートが完成し、学生窓口にアンケートの学内掲示を提案するも、実現に至らず。ダイバーシティ推進センターへ相談し、協力を得る。
2023	4	アンケート実施に向けて、ダイバーシティ推進センターとアンケート内容等の修正を進める。
	6~8	「生理用品設置に関するアンケート」を実施する。埼大関係者（学生、院生、留学生、教職員）約8000人に向け、学内チラシを掲示したり、授業で告知し、826名から回答を得る。
	9	アンケートの集計結果をダイバーシティ推進センターに報告する。生理用品、サニタリーボックスの設置に向けて、具体的な会議が始まる。
	10~11	協力企業が見つかり、無料生理用品設置のモニタリングを実施する。学内22箇所（女性トイレ12、みんなのトイレ6、男性トイレ2）に設置し、計862枚のナプキンが使用される。
	11	埼玉大学学園祭にて「展示：知ってほしい生理のリアル」で「生理用品の設置に関するアンケート」の集計結果を公開する。
	12	学内24箇所（女性トイレ13、みんなのトイレ9、男性トイレ2）における生理用品と男性トイレにおけるサニタリーボックスの本設置が開始する。
	1	第3回パートナーシップさいたまフェスタにて「展示：知って欲しい生理のリアル」を開催する。
	1	季刊誌『季刊セクシュアリティ』にて活動の紹介をする。

	2	「無料の生理用品を学内24か所に設置　埼玉大、男性トイレ含む」『東京新聞』（2024年2月12日朝刊）
	2	「無料の生理用品、男性用トイレにも…埼玉大学の学生団体が提案」『読売新聞』（2024年2月22日朝刊）
	3	「学内の男性トイレに生理用品を設置　埼玉大学のプロジェクト、狙いと実際の成果は」『デイリー新潮』（2024年3月2日）

ダイバーシティ推進センターの協力を得るまで

プロジェクトは企画されてから設置まで直線的な道のりではありませんでした。最初にプロジェクト企画、アンケート作成、ダイバーシティ推進センターの協力獲得、アンケート実施までの過程を紹介します。

2022年6月、あるメンバーの声から、プロジェクトの企画が始まりました。Spring Upでは、イベントやプロジェクト等を開始する前に、目的や目標、対象者、今後のスケジュールなどを企画書にまとめます。本プロジェクトでも、プロジェクト開始時に企画書の作成に取り掛かりました。メンバー同士で議論を重ねながら、プロジェクトの目的等を明確にしていきました。設置の実現に向けて取り組むべきことを話し合った際に、私たちの意見のみで実施するのではなく、埼玉大学内の生理に関する実態を把握し、無料生理用品設置への意識を調査したうえで、大学に提言する必要があるという考えに至りました。そのため、「生理用品の設置アンケート」の作成・実施が決定しました。

アンケートは、プロジェクト始動の2022年6月に作成を開始し、メンバーで議論を重ね、修正を繰り返しながら、同年10月に完成しました。その後、同年11月に埼玉大学総務課に、アンケートの実施希望及び、学内のトイレのドアにアンケート募集のためのポスター（資料1）を掲示させてほしい旨をご連絡しました。メールには、アンケート調査の概要や実際のアンケートフォーム、団体定款を添付し、生理用品とナプキンの設置へのSpring Upの考えを綴りました。しかしながら、学内のサークル等における掲示物のルール違反となることを理由に、許可は下りませんでした。学内の一般の掲示板であれば、許可手続きを行っているとのことでしたが、より多くの方に周知するために、トイレへのポスターの掲示は必須であると考えていたため、ここでプロジェクトは一時停止しました。

そこで私たちは、ダイバーシティ推進センターに協力を求めました。一部のメンバーはセンター長である田代美江子教授の講義を受けたことがあり、プロジェクトの内容を加味し、相談するに至りました。田代教授へプロジェクトの説明を行い、議論を行ったのち、ダイバーシティ推進センターのセンター員である、菅野摂子准教授と瀬山紀子准教授を紹介いただきました。アンケートの精度をあげるため何度も会議を行いました。そして、アンケート回答者数の目標として、埼玉大学関係者の約8000人のうち1割である800人と設定しました。結果的に、トイレへのポスター設置は実現しませんでしたが、「センターと共同」であることがアンケート及びSpring Upの信頼の担保し、センター員の先生方やメンバーが受講している先生方の講義で回答募集の時間をいただけました。

最終的に、目標の800人を超える回答を得ることができ、一定数の埼玉大学関係者の声を集めることができました。

「生理用品の設置に関するアンケート」の概要、結果

アンケート結果は、『生理用品の設置に関するアンケート報告書』としてまとめられており、結果の詳細はそちらに記載してありますので、関心のある方はそちらをご参照ください。本声明で全てを紹介することはできないため、一部抜粋した結果を紹介します。

実施期間：2023年6月1日～8月1日
目的：埼玉大学における生理・生理の貧困に関する実態と、生理用品の無料設置に対する意識を調査する。
アンケート対象者：埼玉大学のトイレを使うすべての人（学生、職員、その他）
言語：日本語、英語
回答者募集方法：①学内にてポスター掲示②協力教授を通じた講義前後での回答募集[3]
回答者数：826人（内訳：日本語813、英語13）

1．回答者属性

a. 所属

埼玉大学生（大学院生を含む）：749人（90.7%）
埼玉大学教職員：57人（6.9%）
その他[4]：20人（2.4%）

b. 回答者の生理の有無[5]

生理がある：536人（64.9%）
生理がない：276人（33.4%）
過去にあったが、現在はない：14人（1.7%）

c. 利用するトイレ別の回答者属性

本大学のトイレには「みんなのトイレ」「女性トイレ」「男性トイレ」の三種類が存在します。必ずしも、すべての人が一つの種類のトイレを利用するとは限らないため、回答は複数選択を可能にしました。以上を踏まえ、回答者の「よく利用するトイレの種類」に関しては以下の通りです。

女子トイレ利用者：536人（65.0%）
男性トイレ利用者：274人（33.2%）
みんなのトイレ利用者：15人[6]（1.9%）

2．生理用品の無料設置に関する考え

[3] 回答者募集方法②に関して、埼玉大学で授業を開講している複数名の先生方に協力を依頼しました。授業の開始または終了時の10分程度、アンケートの趣旨説明とQR提示にご協力いただきました。回答はすべて講義参加者の任意としました。
[4] 「その他」の回答者は、本学来校者である可能性が高いと思われます。理由は、本アンケートはGoogle Formを利用したためオンライン上で回答可能ですが、リンク情報の取得は大学内または本学の授業受講生（Webclassを通じた宣伝）のみに制限しているためです。
[5] 本調査では、回答者を「男性/女性」という区分で区切るのではなく、「生理の有無」で区分しました。これは、主に以下の二つの理由から成ります。 一つ目は、女性または男性という回答時の性が必ずしも生理の有無と結びつかない可能性があるからです。例えば、トランスジェンダー男性が「男性」という回答をした場合であっても、その人に「生理」がある場合もあり得ます。本調査協力依頼をした際、依頼先から「生理についてのアンケートだが、男性も答えられるのか」という質問を受けました。そこには「生理」がある「男性」は「存在しない」という前提があります。このような調査時における「差別」をなくすという意味をこめて、「生理の有無」で調査しました。 二つ目は、閉経または、トランス移行等に関わり生理が過去の経験である回答者と生理が現在進行形で起きている回答者を二次分析で分けて分析できるようにするためです。
[6] みんなのトイレ利用者の割合は、「みんなのトイレ」のみを選択した4人、複数選択で「女子トイレとみんなのトイレ」を選択した8人、「男子トイレとみんなのトイレ」を選択した3人の合計の割合です。

a. トイレ種別にみた生理用品の設置についての賛否[7]

生理用品の無料設置に賛成/反対ですか。賛成の場合は、どの種別のトイレに設置すべきと考えますか。【当てはまるもの全てにチェックを入れてください。】

・設置に関する「賛成・反対」割合
賛成（①～⑥選択者）：804人（97.6%）
反対（⑦選択者）：20人（2.4%）

・トイレ種別の「賛成」割合
女性トイレ（①～③選択者）：767人（92.9%）
みんなのトイレ（①、③、④選択者）：538人（65.1%）
男性トイレ（③、⑤、⑥選択者）：177人（21.4%）

・詳細
①「賛成ー女性トイレ」「賛成ーみんなのトイレ」複数選択者：330人（40.0%）
②「賛成ー女性トイレ」のみ選択者：263人（31.8%）
③「賛成ー女性トイレ」「賛成ーみんなのトイレ」「賛成ー男性トイレ」複数選択者：173人（20.8%）
④「賛成ーみんなのトイレ」のみ選択者：34人（4.1%）
⑤「賛成ー男性トイレ」のみ選択者：4人（0.4%）
⑥「賛成ーみんなトイレ」「賛成ー男性トイレ」複数選択者：1人（0.1%）
⑦「反対」のみ選択者：20人（2.4%）

無料生理用品設置の詳細

「生理用品設置に関するアンケート」を経て、ダイバーシティ推進センターにご尽力いただき、協力企業が見つかりました。その後、2023年10月19日～11月19日のモニタリング期間の後、2023年12月1日から無料生理用品の本設置が始まりました。

具体的な設置箇所は、各学部棟に最低１箇所、学生が多く利用する主要施設に適宜必要数を加味し決定しました。モデリング期間での利用枚数やアンケート回答の声をもとに、本設置では2箇所の設置場所の増加や、生理用品の入っているディスペンサー（箱）数の増加を行いました。設置箇所およびディスペンサー数はページ末尾の資料2を参照ください。

ディスペンサーの設置位置に関しては、設置場所によって「個室」と「洗面台」の両方を採用しています。ディスペンサーを1個しかおけない場合は「個室」に、食堂のように大人数の利用者が想定される場合は「洗面台」と「個室」の両方に設置しています。これは、「洗面台」だと他の人に取得している姿を見られることで利用を躊躇する可能性や、生理がきたことを個室内で気が付く場合があることを想定しています。

生理用品は、羽付きナプキン21cmを設置しています。モニタリング期間では、羽無しナプキン21cmを設置していましたが、モニタリングと同時に募集していた「無料生理用品利用に関するアンケート」にて、羽付きナプキンを希望する声があったことと、プロジェクトの目的の一つである「生理による辛くて面倒な思いを楽にし」をより実現するために、12月からは羽付きナプキンに変更しました。

[7] 回答時にいずれかのトイレに賛成した場合、「反対」を選択不可とする限定をしなかったため、いずれかのトイレに生理用品を無料設置することに「賛成」かつ「反対」の回答（2人）を無効としました。よって、本項目の回答人数は824人です。

ナプキンを管理するディスペンサー（箱）は、日本における生理に関する様々な問題を研究する大阪大学の「MeWプロジェクト」が開発した、生理用品無償提供のための「MeWディスペンサー」を利用しています。

「すべての人が」過ごしやすいトイレプロジェクトの思い

設計段階からすべての人に

私たちが最初に生理用品をトイレに設置することを企画した当初、想定していた設置場所は「女性トイレ」のみでした。むしろ、男性トイレに関しては、もう一つの目標であったサニタリーボックスの設置のみでした。この男性トイレに生理用品を設置する考えに至ったきっかけは、ジェンダーの講義に参加していたメンバーが教諭から紹介された「トランスジェンダーのリアル」という冊子や、『トランスジェンダー男性学』という本に出会う中で、トランス男性が「男性トイレ」を使用することにどのような経験・困難・想いを持っているのかに触れたことがあったからでした。その中では、トランス男性が個室トイレ内にサニタリーボックスが設置されていないことを理由に、使用後の生理ナプキンを持参した袋に入れて持って帰る実態や、トランス男性が「男性トイレ」を使用することの葛藤が描かれていました。このことをメンバーに共有することで「すべての人」の中でも見えていない、無意識に排除している構造に私たち自身も気付かされました。男性個室トイレにサニタリーボックスを設置するのであれば、必然的に、生理のあるトランス男性が男性トイレを利用することを想定するため、生理用品を男性トイレに設置することも目標に入れました。

男性トイレへの設置が意味すること

最初はジェンダーの観点からサニタリーボックスの設置を考えていましたが、すでに男性個室トイレに設置されている外部の事例に目を通すと、前立腺がんや腸疾患を患っている場合におむつや尿漏れパッドを利用されている男性も存在することがわかりました[8]。トイレを違和感なく利用できる利用者側が「トイレ利用者」として想定しやすい対象は、すでに社会階層・健常者・男女二元論・（宗教や人種）などによって規定（制限）されていることに気付かされます[9]。設計者や利用者は、無意識的に存在する「私には必要がないから」という理由をもとに、「自然」に予算を削ることができる権力を持っています。現在のトイレ環境とは、そのような無意識の権力を行使した結果出来上がったものであり、言い換えれば、無意識のうちにマジョリティに利益を与えられた結果の状態なのです。SNS上で散見された「私は使わないな」という言葉は、確かにそうかもしれませんが、その発言を容易にできること自体がこの社会で権力を所持していることを意味し、現在のトイレ環境を作り上げることに一役買っているのです。このプロジェクトは、単純に理解されがちな、マイノリティの「ために」やっていることではなく、問い直されるべきは「マジョリティ」の側にあるはずという考えが根底にあります。当然、私たちが今回行ったトイレの変化も十分ではなく、社会環境の変化によって、それでも「排除」していることがありえます。しかし、その都度プロジェクトを計画し直すことは労力と時間を必要とすることを、今回のプロジェクトを通して感じました。排除の論理が再生産され続けることを避けるためには、「誰を」トイレ利用者として想定するのかという意識に注意深くなければならないと考えます。よって、男性

---

[8] このことは、後に埼玉大学のダイバーシティ推進センターと共同し、ともにプロジェクトを進めた菅野摂子准教授の専門分野でもあり、この実態についてご教授くださいました。

[9] 人種、ジェンダー、セクシュアリティ、階級、ネイション、アビリティ、エスニシティ、年齢等の様々なカテゴリーが交差する権力関係が、様々な社会にまたがる社会的関係や、個人の日常経験に影響を及ぼしていることを「インターセクショナリティ」と呼びます。（パトリシア・ヒル・コリンズ 2020）

トイレへの設置があなたにとって「本当に無関係なのか」という疑問を再度問いかけるために、私たちは設置だけで終わるのではなく展示を行っています。

存在を保証する

男性トイレに生理用品を設置するということは、トランスジェンダーの存在を「制度上」保証することを意味しています。プロジェクト会議の議事録に男性個室トイレのサニタリーボックスを設置することに対するこのような意見がありました。

> 男性トイレ、女性トイレ、みんなのトイレと３分割することでみんなのトイレがいわゆる「包摂的」にはなるのだろうが、その一方でトランス男性が男性であるというアイデンティティを持ちながら男性トイレを使用することができないという現在の状況はおかしいと考える。せめてサニタリーボックスの設置が彼らが男性トイレで彼らでいられながら使用することができる一つのこころのシンボルになると考える。

男性トイレのサニタリーボックス・生理用品の設置には「設置」以上の意味が込められています。トランスジェンダーの性別適合手術[10]の移行状態にはグラデーションがあることはまだ社会的に認識されていません。例えば、トランス男性当事者であり『トランスジェンダー男性学』を執筆された周治あきらさんはトランス男性の状況について以下のように記しています。

トランス男性の話を進める前に、三つの状況があることに着目してください。

1. トランス男性はシス男性[11]同様の生活を送っている場合がある
2. トランス男性はシス男性同様の生活を送りたくても不可能な場合がある
3. トランス男性はシス男性同様のあり方を望んでいない場合がある

これらはバラバラに位置づけられるものではなく、一人のトランス男性がすべての状況を経験する場合があります。（周司 *2021: 4-5*）

まとめるならば「トランスジェンダー」とはこういうものであるといった一元的な実態は存在せず、「自認」「見た目」「行為」だけで見ても多様な実態が存在しているということです。トランスジェンダーに限らず、多くの人々は外見や振る舞いから他者の「性別」を判断できると思い込んでいますが、実際それほど単純ではありません。また「性別適合手術を施さない限り自認する性を他者から認められない」というのも異なります。適合手術をせずとも実質的に現在の社会に埋没しているトランスジェンダーもたしかに存在しています。しかし、その人の存在を認めるために、外見や振る舞いが「女らしさ」や「男らしさ」から逸脱しないよう求めることにも危険が潜んでいます。外見や振る舞いによって判断することは、例えば「女性らしい（女性に見える）トランスジェンダー女性」は女性トイレを利用することができるにも関わらず、「女性らしくない（女性っぽく見えない）トランスジェンダー女性」は女性として認められず、女性トイレの利用を妨げられるなど、外見をもとに社会生活を拘束されることに繋がってしまいます。しかし、骨格などの特性から「見た目」と自認する性を一致させることが難しい当事者も存在することや、見た目や「らしさ」は状況や周囲の人々の主観によって異なるといった問題も存在します。このような外見を判断材料として処遇の差をつけることは人権侵害である「ルッキズム」につながると考えます。ただ自認する性と表現したい性のままで生きたいと願う当事者に対し、「トランスジェンダー」という言葉がこうした性のありようを見えなくしている実態があるのです。

---

[10] 「性別適合手術」はかつて「性転換手術」と呼ばれていました。同様に、「性同一性障害」は現在「性別違和」と呼ばれています。このように、割り当てられた性と自認する性が異なる状態をかつては「個人の問題」として捉え、障害化してきました。しかし、現在の潮流として、性が異なることは「違和」であり、当事者にとって二つの性を「適合」していくという観点から「性別適合手術」という名称の変更がなされています。

[11] シスとは、基本的には割り当てられた性と自認する性が一致している人を指す言葉です。

SNS上で度々取り上げられる「トランス女性が女性トイレに”侵入”することが怖い」という恐怖ばかりがとりあげられる一方で、「炎上」で標的にされるトランスジェンダーたちはその向けられる目に細心の注意を払いながら生活を送っている現状があります。多くのトランスジェンダー当事者はこのような周囲からの視線を敏感に察知しながら利用するトイレを選択している現状があります。金沢大学とLIXIL等が実施した調査[12]によると、職場で「利用するトイレ」と「利用したいトイレ」が不一致の（利用したいトイレが利用できない）トランスジェンダー当事者は約4割にも及ぶと報告されています。他方で、シスジェンダーの7割がトランスジェンダーが性自認に沿ってトイレを利用することに対して「どちらかと言えば抵抗はない/抵抗はない」と回答したと報告しています。興味深いことに、LGBT等性的マイノリティに関する研修やセミナーを受講した経験のある人は、受講したことがない人よりも、「抵抗はない」の回答が4.6%も高いことも報告されています[13]。一概には言えませんが、トランスジェンダーのトイレ利用に対する人々の考え方は、ネットの「炎上」度合いと調査等による「実態」の間に乖離があると考えられます。また、その乖離の原因として、トランスジェンダーに関する知識不足や、当事者の存在を想定していないこと、異なる他者への不寛容が影響しているとも考えられます。

私たちは、プロジェクト目的を「トランス男性の存在」と記載するのではなく、「生理があっても見えない存在とされてきた男性がいる現状を認識してもらえるようにする」としています。この表現を単純に「トランス男性」とすることは、トランス男性の移行状態や生活実践の多様さに対応しておらず、「トランス男性」を一括りすることになってしまいます。私たちが設計の段階から「男性トイレ」から生理用品の設置を外してしまうことは、たしかに存在する生理のある男性たちの「アイデンティティ」や「存在」そのものを否定することになります。男性トイレへの生理用品の設置には、生理があっても見えない存在にされてきた人々がどのような移行状態・スタンスであったとしても、その存在が保証される制度を作りたい、という私たちの思いが込められています。

生理のタブーを覆す

日本を含む世界では、生理を恥ずかしいものであるとしてタブー視し、隠す風潮があります。例えば、あるメンバーはプロジェクト会議にて、周囲に自分が生理期間中であることを知られることを恥ずかしく感じていたと話しました。生理用品の入ったポーチをトイレに持ち込む際に、人の目が気になっていたと言います。生理の有無に関わらず、公の場では生理の話をしてはいけないという風潮もあります。特に、生理が無い人の中には、生理の話題に触れてはいけないと思っている人も多いと思います。しかしながら、生理は当たり前の現象であり、生理のタブー視は生理のある人の個人的な問題ではなく、すべての人に関わる社会的・政治的な問題です。例えば、生理がタブーとされる現状は、生理がある人に対して、生理による体調不良や生理に関する悩みを周囲に伝えにくくなる要因になります。生理が無い人に対しては、生理に関する知識を得にくかったり、身近な人の体調不良や悩みに気づきにくくなる要因になります。当然、生理のことをなんでも話せば良いということではありません。生理期間中に精神的に安定していない[14]人に対して「生理中？」と揶揄されたり無理解な言葉がけをされた経験のある方もいます。生理を話題にするハードルを下げることと、生理の話題を配慮なく話してしまうことは別の問題です。私たちの考える「生理のタブーを覆

[12] 金沢大学, LIXIL, コマニーの産学協同研究会(2023)「「トイレのオールジェンダー利用に関する研究会」による意識調査 結果報告」（最終閲覧日2024/04/09）
https://www.kanazawa-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2023/06/230810.pdf
[13] ただし、同報告書内にて、研修やセミナーを受講したことがある人はシスジェンダー全体の1割程度に過ぎないことも指摘されています。
[14]月経（生理）前に、3日～10日間続く精神的あるいは身体的不調のことを月経前症候群（PMS）と呼びます。その症状や重さには個人差があります。

す」とは、掲げた目的と共に、生理への理解を促し、生理に関わる問題や課題の解決につなげることだと考えます。

私たちは、生理のタブーを覆すため、本プロジェクトを通していくつかの取り組みを行いました。まず、私たちは「生理用品の設置に関するアンケート」の実施を通して、生理のタブーを覆そうと試みました。このアンケートは、生理の有無に関わらず、すべての人が同じアンケートに回答できるように作成しています。すべての人をアンケートの対象とすることで、生理を生理がある人だけの個人的な問題ではなく、すべての人に関わる社会的・政治的な問題として示すことができると考えました。実際にアンケートの自由解答欄には「生理について初めて考える良い機会になった」「生理に関してジェンダー的に考えたことがなかったので、このアンケートでは考えさせられました」などの声をいただきました。また、生理用品の設置自体も、生理について話すきっかけ作りになると考えています。生理がある人同士でも、生理＝恥ずかしい、生理について人前で話すことは良くないという生理のタブーはまだ残っているのが現状です。生理のタブーの意識を持っているトイレ利用者に対して、生理用品の設置を通して生理についてオープンに話しても良いと示すことができると考えます。これは、生理が無い人に対しても、同じく示すことができると考えています。生理が無い人の身近に生理用品を設置することは、アンケートと同様、生理をすべての人に関わる社会的・政治的な問題として示すと同時に、生理が無い人も生理について話すきっかけになると考えます。

利用実態

実際に生理用品を設置してからの現状（利用状況、利用者アンケート）についてお話します。まず、現在の利用状況については、2024年3月6日までで合計1990個のナプキンを補充しており、モニタリング期間の個数と合わせて、これまでに約2000個以上利用されています。補充やディスペンサーの点検、利用枚数の統計は設置企業の方にお願いしています。

私たちはトイレ内のディスペンサーの横にポスターを設置しており、そこにはディスペンサー設置以前に行った「生理用品の設置に関するアンケート」の結果の一部及び、「生理用品の利用に関するアンケート」に応えることができるQRコードが掲載されています（資料3）。生理用品を利用した人は利用場所や補充状況の報告、利用理由、意見、感想が送れるようになっています。これらの意見をもとに、設置箇所の再検討やナプキンの種類の変更などを行い、その一つ一つの声がより過ごしやすいトイレにするために活用されています。これまで届いた感想のなかには、「急に生理がきた時に安心感が大きい」「鞄をコソコソしてトイレに行って、、、という嫌な工程を省けると思った」「生理用品の残数を確認して用意をするという工程を省けるかもと思った」「経済的な理由で生理用品の購入が難しいので利用した」「クローゼット[15]ですがトランスなので、女子トイレだけでなく、男子/みんなのトイレにも設置されていることをとても嬉しく思います。」というものがありました。このような感想からは、生理用品が必要な人というのは一概に決めつけられるものではなく、生理用品の必要性の実態は多様であり、必要な状況には複合的な要因があることが読み取れます。まだまだ生理用品の設置は一般的な事柄ではなく、一部の商業施設や公的施設など限定的にしかこのような取り組みは行われていません。また、「本当に必要な人」にという提供への制限をすることによって「自分が本当に必要な人なのか」という疑念を浮かばせ、届けたい人に届けられないなどの声もヒアリングで分かってきました。できる限り「すべての人」に届けられることが、「必要な人」に届くための環境づくりになると、利用アンケートを通じて考えています。

一方で、このように利用個数が多くなることで矢面に立たされる問題が「どこから資金を出すのか」ということです。「資金源が気になる」などの声もたくさんいただきました。設置に

[15] 他者にカミングアウトしていないこと、またそのような状態のことを「クローゼット」と表現します。

関わる資金は、現在のところダイバーシティ推進センターの年度予算から拠出されています。私たちはこの取り組みが続いていくためには、トイレットペーパーの予算のように、大学の予算に計上されることが必要だと考えています。学費や税金が「女性のためだけ」に使われることに対して反発する声もありましたが、この取り組みが「生理のある人」だけの問題だけでなく、「すべての人」に関係のある問題であることが周知される必要があると考えています。

また、男性トイレに設置したことへの疑問も受け取っており、「なぜ設置するのか」「理由が知りたい」という意見もありました。説明の周知がまだまだであり、新入生が入学すれば、「あたりまえ」に大学に設置してあるように受け取られることもあります。設置した理由は「ディスペンサーをみてもらうだけ」では伝えられません。ディスペンサーを見て関心を持った人に目的を伝えるという過程が必要になります。そのため私たちは様々な方法でその理由や背景目的を伝え続ける必要があると考えています。

最後に

私たちの「すべての人が過ごしやすいトイレプロジェクト」は生理用品を設置して終わりというものではありません。他大学で設置に尽力されている方にお話を伺った際に、印象深い言葉をいただきました。

「私たちには問題を残していく責任がある」

生理用品の設置は現実的な困りごとに対する喫緊の対応の一つです。これまで記述してきた通り、このプロジェクトは「生理のタブー」「生理への無理解」「生理があっても見えない存在にされてきた人々」「サニタリーボックスの必要な人々」など見過ごされてきた生理やトイレの問題を「マイノリティのため」だけでなく「マジョリティの問い直し」として行うことに意味があります。ただそこにあるだけでは「便利」なだけで消費されていく生理用品ですが、埼玉大学内だけ「便利」になっても意味が乏しく、この取り組みは社会的に見れば道半ばなものです。取り組みに関心をもってもらい、その背景や実態を通じて「共に考える仲間」が増えることで歩みがより深く・広くなっていくものだと考えています。一人のメンバーが最初にあげた小さな声を他のメンバーが大切にすることでここまでこれたように、共に考える仲間が増え、関心が広がっていけばと思っています。

参考・引用文献・資料

周司あきら(2021)『トランス男性によるトランスジェンダー男性学』大月書店
田中ひかる(2013)『生理用品の社会史　タブーから一大ビジネスへ』ミネルヴァ書房
ショーン・フェイ, 高井ゆと里訳(2022)『トランスジェンダー問題　議論は正義のために』明石書店
パトリシア・ヒル・コリンズ, 小野理乃訳(2021)『インターセクショナリティ』人文書院

Spring Up(2023)「『生理用品の設置に関するアンケート』報告書」
Spring Up(2023)「『生理用品利用に関するアンケート』中間報告書」
谷本成星(2024)「学生主体で大学トイレをデザインする」季刊セクシュアリティ114, p.46-53

資料1　設置に関するアンケートポスター

埼大のすべてのトイレに無料生理用品を設置したい!

アンケートへのご協力をお願いします。

回答目安時間：1分

←回答はこちら

すべてのジェンダーのトイレに無料で生理用品を設置することで、大学生活を少しでも過ごしやすくし、生理についてより多くの人が意識を見直す機会を作ることができると考えました！
詳しくは Instagram@springup_saitamaをご覧ください。

このアンケートは埼玉大学ダイバーシティ推進センターの協力のもと、
埼大を拠点に活動する団体「SpringUp」が行っています。

連絡先：springup.saitama@gmail.com

資料2　生理用品設置箇所およびディスペンサー数（2024年3月現在）

〇全学講義棟1号館（西側）1階
・女性トイレ個室：MeWディスペンサー1
・女性トイレ洗面台近く：MeWディスペンサー2
・多目的トイレ：MeWディスペンサー1
・男性トイレ個室：MeWディスペンサー1
〇全学講義棟1号館（東側）1階

・女性トイレ洗面台近く：MeWディスペンサー1
〇全学講義棟2号館1階
・女性トイレ：MeWディスペンサー1
・みんなのトイレ：MeWディスペンサー1
〇全学講義棟3号館1階
・みんなのトイレ：MeWディスペンサー1
〇図書館1号館2階
・女性トイレ個室：MeWディスペンサー1
・みんなのトイレ：MeWディスペンサー1
〇第1食堂1階
・女性トイレ個室：MeWディスペンサー2
・みんなのトイレ：MeWディスペンサー1
〇第2食堂1階
・女性トイレ個室：MeWディスペンサー1
・女性トイレ洗面台近く：MeWディスペンサー2
・みんなのトイレ：MeWディスペンサー1
・男性トイレ個室：MeWディスペンサー1
〇教養学部棟2階
・女性トイレ個室：MeWディスペンサー1
〇経済学部A棟1階
・女性トイレ個室：MeWディスペンサー1
〇経済学部B棟1階
・みんなのトイレ：MeWディスペンサー1
〇理学部1号館2階
・女性トイレ洗面台近く：MeWディスペンサー1
〇工学部講義棟1階
・女性トイレ洗面台近く：MeWディスペンサー1
〇教育学部A棟2階
・女性トイレ個室：MeWディスペンサー1
・女性トイレ洗面台近く：MeWディスペンサー2
〇総合体育館1階
・女性トイレ個室：MeWディスペンサー1

・各設置箇所別総数：24箇所
女性トイレ：13箇所
みんなのトイレ：9箇所
男性トイレ：2箇所

・総ディスペンサー数　28個

資料3　利用に関するアンケートポスター

無料生理用品を ぜひご利用ください

アンケートへのご協力をお願いします。

回答目安時間：1分

←回答はこちら

無料の生理用品の設置と皆さんの生理の状況に関する
アンケート調査を終え、一項目の
「生理に関する困りごと」の結果を共有いたします。
ご協力ありがとうございました！
今後とも、皆さんと一緒に埼玉大学の生理に関する状況
を考えていきたいと思います。
アンケートの報告はむつめ祭の『Spring Up』ブース
にて行います。ぜひお待ちしてます！

このアンケートは埼玉大学ダイバーシティ推進センターの協力のもと、
埼大を拠点に活動する団体「Spring Up」が行っています。

連絡先：springup.saitama@gmail.com

@SPRINGUP_SAITAMA